令和７年度

講 義 要 項

心理学研究科臨床心理学専攻

修 士 課 程

埼玉学園大学大学院

成績評価について

〔成績評価の方法〕

授業科目毎の成績評価方法は各科目のシラバスに記載されています。評価項目ごとに配点比率が明示されていますので、確認してください。

〔成績評価の内容〕

成績は、「S」「A」「B」「C」「D」と表記されます。このうち「S」「A」「B」「C」は合格です。合格と判定された科目には所定の単位が与えられます。「D」と表記された科目は不合格ですので単位は修得できません。具体的な評価内容は以下のとおりです。

素点	100～90	89～80	79～70	69～60	59～0
成績通知表	S	A	B	C	不可
成績証明書(和文)	S	A	B	C	表記しません
成績証明書(英文)	S	A	B	C	表記しません
合否	合　　格				不合格

※ 令和４年度までの成績評価で、素点が 90 点以上だったものは「S」として取り扱います。

目　次

臨床心理学特論Ⅰ［大川　一郎］----------1
臨床心理学特論Ⅱ［佐々木美恵］----------2
臨床心理面接特論Ⅰ（心理支援に関する理論と実践）［羽鳥　健司］----------3
臨床心理面接特論Ⅱ［泉水　紀彦］----------4
臨床心理査定演習Ⅰ（心理的アセスメントに関する理論と実践）［佐々木美恵］---------5
臨床心理査定演習Ⅱ［伊里　綾子］----------6
臨床心理基礎実習Ⅰ［伊里・藤枝］----------7
臨床心理基礎実習Ⅱ［佐々木・大川］----------8
心理実践実習Ａ［羽鳥・伊里・遠藤・大川・佐々木・森・泉水・中谷・藤枝］----------9
心理実践実習Ｂ［森・中谷］----------10
心理実践実習Ｃ［遠藤・伊里・大川・佐々木・森・泉水・中谷・羽鳥・藤枝］----------11
臨床心理実習Ⅰ(心理実践実習Ｄ)［泉水・羽鳥］----------12
臨床心理実習Ⅱ［中谷・伊里・大川・佐々木・森・泉水・羽鳥・藤枝］----------13
データ解析法特論［米村　朋子］----------14
臨床心理学研究法特論［宇野あかり］----------15
教育心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）［藤枝　静暁］----------16
発達心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）［大川　一郎］----------17
人間関係学特論［高田　圭二］----------18
心身医学特論（保健医療分野に関する理論と支援の展開）［※担当者未定］----------19
精神医学特論（保健医療分野に関する理論と支援の展開）［柴田　　勲］----------20
犯罪・非行心理学特論（司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開）［古曳　牧人］-----21
健康心理実践特論（心の健康教育に関する理論と実践）［遠藤　寛子］----------22
心理療法特論［羽鳥　健司］----------23
障害者（児）心理学特論（福祉分野に関する理論と支援の展開）［森　　裕幸］---------24
学校臨床心理学特論［中谷　隆子］----------25
グループ・アプローチ特論（家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践）［藤枝　静暁］-------26
産業・組織心理学特論（産業・労働分野に関する理論と支援の展開）［原　　恵子］-----27
特別課題研究Ⅰ［大川　一郎］----------28
特別課題研究Ⅰ［藤枝　静暁］----------29
特別課題研究Ⅰ［佐々木美恵］----------30
特別課題研究Ⅰ［羽鳥　健司］----------31
特別課題研究Ⅰ［原　　恵子］----------32
特別課題研究Ⅰ［遠藤　寛子］----------33
特別課題研究Ⅱ［大川　一郎］----------34
特別課題研究Ⅱ［藤枝　静暁］----------35
特別課題研究Ⅱ［佐々木美恵］----------36
特別課題研究Ⅱ［羽鳥　健司］----------37
特別課題研究Ⅱ［原　　恵子］----------38
特別課題研究Ⅱ［遠藤　寛子］----------39

臨床心理学特論Ⅰ　　大川 一郎

授業概要

心理援助を展開する上で求められる臨床心理学的考え方や知識、技術について学ぶことを目的とする。具体的には、公認心理師法が施行された今、心理専門家として理解すべき臨床心理学の主要な課題やトピックスを取り上げる。また、そこから浮かび上がる臨床心理学に内在する問題点や今日的課題、今後の方向性などの検討を通して、高度な心理専門職者として期待される役割、期待される専門性と倫理、方法論を明らかにし、それらの理解と知識と態度の習得を目指した講義を行う。

授業計画

第１回	ガイダンス：本講義の目的と意義、進め方、到達点について
第２回	臨床心理学の全体像（１）：その成り立ち
第３回	臨床心理学の全体像（２）：系譜
第４回	臨床心理学の全体像（３）：中心となる理論
第５回	心理援助の実際（１）：幼児期・児童期
第６回	心理援助の実際（２）：思春期・青年期
第７回	心理援助の実際（３）：成人（前期―中期）
第８回	心理援助の実際（４）：成人（後期―晩期）
第９回	ミクロの支援とマクロの支援（１）：自助・互助
第10回	ミクロの支援とマクロの支援（２）：共助・公助
第11回	心理援助の理論と技法（１）
第12回	心理援助の理論と技法（２）
第13回	心理専門職に必要な資質と能力
第14回	心理専門職に求められる職業倫理
第15回	授業のまとめ
第16回	試験

到達目標

（１） 臨床心理学の時代的要請と社会的受容について理解できる。
（２） 臨床心理学、心理臨床の理論と技法について理解できる。
（３） 臨床心理士・公認心理師の業務の実際を理解し、その専門性と倫理について理解できる。
（４） 臨床心理士・公認心理師として心理臨床の実践の独自性について説明できる。
（５） 心理専門職としての人々の福祉のために活躍・貢献するという高い意識を醸成する。

履修上の注意

（１） 授業の中で紹介する参考文献等を主体的に自学自習し、問題意識を深めること。
（２） 授業の中では積極的に発言し、教員との意見交換を行うこと。
（３） 授業内で行うグループワークに能動的に参加すること。
（４） 事例等を活用した倫理問題なども扱うので、高いプライバシー保護意識を持って受講すること。

予習・復習

授業に際しては、予習のために事前に講義資料等を配布するので、それを学習した上で授業に臨むことを期待する。

評価方法

成績評価は、リアクションペーパーの内容（20%），受講態度（10%），テストの結果（70%）を合わせて，総合的に評価する。

テキスト

授業では、各トピックに沿った資料を配付する予定である。参考書については、授業内で、適宜紹介する。

臨床心理学特論Ⅱ　　佐々木 美恵

授業概要

まず，心理面接および心理援助の基本的な考え方や方法，および基礎理論について，主に精神分析的，力動的オリエンテーションに基づいて講義する。次に，心理職が関わる諸問題をトピックとして取り上げ，心理職としての基礎知識，実践上の留意点等を講義する。

授業計画

第１回	心理面接・心理援助の基礎Ⅰ：インテークの方法と留意点
第２回	心理面接・心理援助の基礎Ⅱ：アセスメントと治療契約
第３回	心理面接・心理援助の基礎Ⅲ：治療構造論
第４回	心理面接・心理援助の基礎Ⅳ：治療面接で生じる諸問題と対応①
第５回	心理面接・心理援助の基礎Ⅴ：治療面接で生じる諸問題と対応②
第６回	心理面接・心理援助の基礎Ⅵ：病態水準の理解，アセスメントの観点
第７回	心理面接・心理援助の基礎Ⅶ：事例による理解①
第８回	心理面接・心理援助の基礎Ⅷ：事例による理解②
第９回	場面緘黙：状態像，成因，セラピー・対応
第 10 回	反応性アタッチメント症/脱抑制型対人交流症：状態像，成因，セラピー・対応
第 11 回	神経性やせ症/神経性過食症：状態像，成因，セラピー・対応
第 12 回	統合失調症：状態像，成因，セラピー・対応
第 13 回	ボーダーラインパーソナリティ症：状態像，セラピー・対応，支援上の留意点
第 14 回	自己愛性パーソナリティ症：状態像，セラピー・対応，支援上の留意点
第 15 回	解離性健忘：状態像，成因，セラピー・対応
第 16 回	筆記試験

到達目標

1．精神分析的，力動的オリエンテーションに基づくインテーク，アセスメントおよび治療契約の考え方と方法について説明することができる。
2．心理面接における治療構造の意味と実践上の留意点について説明することができる。
3．授業で取り上げた，心理職が関わる諸問題について，心理職による寄与と支援の要点を説明することができる。

履修上の注意

積極的に議論に参加し，授業内容の深化に寄与する姿勢をもつこと。

予習・復習

予習：関連文献にあらかじめ目を通しておく。
復習：授業ノートの振り返りを行う。

評価方法

授業参加態度（積極性，意欲，主体性）30%，担当発表の内容（資料作成，プレゼンテーション，質疑応答）30%，筆記試験 40%によって評価する。

テキスト

とくになし。適宜文献を紹介する。

臨床心理面接特論Ⅰ
（心理支援に関する理論と実践）

羽鳥 健司

授業概要

心理支援で使用される頻度が高い心理療法の理論と実践について網羅的に学習することを目的とする。本講義では、精神分析および精神分析的心理療法、行動療法、認知行動療法、来談者中心療法、ゲシュタルト療法、実存主義、交流分析、自律訓練法、サイコドラマ、エンカウンター・グループを取り上げ、それぞれの理論的背景と実践方法について習得する。受講者は各心理療法について事前に研究し、担当箇所の発表を求められる。発表者の発表を基に討議を行い、各療法間の共通点や相違点および、要心理支援者のニーズにどの心理支援法を用いることに最も効果が期待できるのかを見きわめられるようになることを目的とする。

授業計画

第１回	オリエンテーション、心理療法の共通点と相違点
第２回	精神分析および分析心理学　S.フロイド、C.G.ユンク
第３回	対象関係論　M.クライン　D.W.ウィニコット
第４回	行動療法　H.J.アイゼンク
第５回	行動療法　B.F.スキナー
第６回	行動療法　J.ウォルピ
第７回	認知行動療法　A.ベック
第８回	認知行動療法　A.エリス
第９回	来談者中心療法　C.R.ロジャーズ
第 10 回	ゲシュタルト療法　F.S.パールズ
第 11 回	実存主義　V.E.フランクル
第 12 回	交流分析　E.バーン
第 13 回	自律訓練法　J.シュルツ
第 14 回	サイコドラマ　J.L.モレノ
第 15 回	エンカウンター・グループ
第 16 回	心理療法の統合モデル

到達目標

１．各心理療法の歴史および理論的背景と実践方法を理解し、説明できる。
２．要心理支援者のニーズや疾患に応じた心理支援を選択できる。
３．各心理療法間の異動と心理療法の統合モデルの説明ができる。

履修上の注意

受講者は、各回を分担し、各心理療法の理論と実践方法について事前にレポートを作成して発表する。この発表を基に討議を通して各心理療法の理論を理解する。

評価方法

発表資料（30%）、発表（30%）、質疑（20%）、討議（20%）などを総合的に評価する。

テキスト

心理療法の諸システム　金子書房を参考資料として用いることがある。
（事前に購入しておく必要はない）

臨床心理面接特論Ⅱ　　泉水 紀彦

授業概要

本講義では，臨床心理面接特論Ⅰで学んだ知識をさらに深め，心理支援で用いられる心理療法の知識や手法について講義する。様々な心理療法の中でも，自律訓練法，マインドフルネス，応用行動分析，プレイセラピー，箱庭療法を取り上げ，それぞれの知識の理解と受講者同士の相互体験を行う。

授業計画

第１回	オリエンテーション
第２回	心理療法の歴史：心理療法の歴史（近代以前，近代以後），催眠療法
第３回	自律訓練法①：自律訓練法の概要，自律訓練法体験
第４回	自律訓練法②：自律訓練法体験
第５回	プレイセラピー①：プレイセラピーの概要，観察学習
第６回	プレイセラピー②：プレイセラピーの体験，観察学習
第７回	プレイセラピー③：プレイセラピーの体験，観察学習
第８回	プレイセラピー④：プレイセラピーの体験，観察学習
第９回	マインドフルネス①：マインドフルネスの概要，マインドフルネスの体験
第10回	マインドフルネス②：マインドフルネスの体験
第11回	応用行動分析①；応用行動分析の概要，行動分析を用いたケース理解
第12回	応用行動分析②：応用行動分析で用いられる技法，ペアレント・トレーニング
第13回	箱庭療法①：箱庭療法の概要，箱庭療法の体験
第14回	箱庭療法②：箱庭療法の体験
第15回	箱庭療法③：箱庭療法の体験
第16回	レポート

到達目標

1．各心理療法の歴史および理論的背景と実践方法を理解し，説明できる。
2．各心理療法を実施する立場を体験し，技法を理解できる。
3．各心理療法の実践体験に開かれ，体験をシェアすることができる。

履修上の注意

各心理療法を体験的に理解するために，実施者と受ける立場を体験してもらう。そのため，積極的に講義に参加することが求められる。

予習・復習

予習として，配付された授業資料を読んで理解を深める。復習として，授業で習得した技法を自宅で練習し，次の授業で感想を共有する。

評価方法

受講態度(70%)，レポート課題(30%)で評価する。

テキスト

特に指定しない。講義は配布資料に基づいて進める。参考書はその都度紹介する。

臨床心理査定演習Ⅰ
（心理的アセスメントに関する理論と実践）

佐々木　美恵

授業概要

心理職における必須の職能である心理的アセスメントについて，①実践における心理的アセスメントの意義，②心理的アセスメントに関する理論と方法，③心理に関する相談，助言，指導等への応用，に沿って指導する。とくに，知能検査の実施，分析，所見書作成，フィードバックの一連の流れについて実践的指導を行う。

授業計画

第１回	心理的アセスメントの各種理論および実践上の意義
第２回	田中ビネー知能検査Ⅵ①：理論と実施法
第３回	田中ビネー知能検査Ⅵ②：履修生同士によるテスティー体験
第４回	田中ビネー知能検査Ⅵ③：心理検査報告書作成/個別指導
第５回	KABC-Ⅱ①：理論と実施法
第６回	KABC-Ⅱ②：履修生同士によるテスティー体験Ⅰ（認知尺度）
第７回	KABC-Ⅱ③：履修生同士によるテスティー体験Ⅱ（習得尺度）
第８回	KABC-Ⅱ④：心理検査報告書作成/個別指導Ⅰ
第９回	KABC-Ⅱ⑤：心理検査報告書作成上の留意点
第 10 回	KABC-Ⅱ⑥：心理検査報告書作成/個別指導Ⅱ
第 11 回	WISC-Ⅴ①：理論と実施法
第 12 回	WISC-Ⅴ②：履修生同士によるテスティー体験
第 13 回	WISC-Ⅴ③：心理検査報告書作成/個別指導
第 14 回	WISC-Ⅴ④：心理検査報告書作成上の留意点
第 15 回	相談，助言，指導における心理的アセスメントの活用：フィードバック

到達目標

1．心理的アセスメントの実践上の意義について理解し，説明することができる。
2．各種知能検査の目的と特長を理解し，説明することができる。
3．各種知能検査を適切に実施することができる。
4．心理検査報告書の形式を整え，必要な内容を備えて作成することができる。

履修上の注意

あくまでも授業内学習であることに十分配慮し，実質的な知能検査とはならないような工夫をもって指導するが，自らの知能査定に近い体験を伴うことを予め了解のうえ，授業に臨むこと。

予習・復習

予習：関連文献にあらかじめ目を通し，用いる知能検査セットの事前学習を行う。
復習：授業ノートおよび配布資料の振り返りを行うとともに，各回の課題に取り組む。

評価方法

心理検査報告書（３種の知能検査報告書および１種の知能検査についてのフィードバック報告書）の到達度 50%，授業参加態度（積極性，意欲，主体性）50%によって評価する。

テキスト

使用しない。関連資料を配布する。

臨床心理査定演習Ⅱ　伊里 綾子

授業概要

本演習では，投映法の心理検査の一つであるロールシャッハ・テストの実施法，スコアリング，解釈を体験的に指導する。まず，受講者は自らが被検者の体験をすることでテストの概要を把握し，テストを受けることが被検者にとってどのような体験となるかについて考察する。そのうえで，テキストを用いてテストの実施法，スコアリングを練習問題に取り組みながら習得する。さらに，架空事例についてスコアリングと解釈を行うことで，臨床実践におけるロールシャッハ・テストの活用法について学ぶ。こうしてテストの実施から解釈までの全体を把握したうえでロールプレイによる検査者体験をし，最後に自身の被検者体験時の結果に基づいて心理検査報告書を作成することで，実践に適用可能な技能と知識を身につけられるよう指導する。

授業計画

第１回	ロールシャッハ・テストの歴史と概要，実施法について
第２回	施行法・スコアリングの種類（反応領域・反応決定因）
第３回	スコアリングの種類（反応決定因・反応内容・形態水準・公共反応）
第４回	スコアリングの基礎知識，実際例２のスコアリング
第５回	実際例２のスコアリング，サマリースコアリングテーブルの作成
第６回	解釈の基礎，反応領域の意味づけ
第７回	反応決定因・反応内容の意味づけ，形式分析についての説明
第８回	継列分析についての説明，実際例２の形式分析
第９回	実際例２の継列分析，実際例２の報告書例についての説明
第10回	受講者データのスコアリング練習１
第11回	受講者データのスコアリング練習２
第12回	ロールプレイによる実施練習
第13回	心理検査報告書作成①：形式分析・継列分析について（個別指導）
第14回	心理検査報告書作成②：報告書の添削（個別指導）
第15回	心理検査報告書作成③：フィードバック用資料の作成（個別指導）

到達目標

1.ロールシャッハ・テストの実施法を理解し，実際に実施することができる。
2.スコアリングの理論を理解し，Scoring Table を作成することができる。
3.解釈についての理論を理解し，テスト結果を解釈することができる。
4.テストの結果および解釈を報告書としてまとめることができる。

履修上の注意

心理検査報告書は，受講者自身のテスト結果について作成する。予習には，受講者が被検者の体験をすることも含まれる。あくまでも授業内での課題であることに十分配慮して指導を行うが，結果を個別指導において扱うことを了解のうえ，体験に臨むこと。

予習・復習

【予習】被検者の体験，指定された資料の講読，指定された練習問題への回答，報告書の作成
【復習】資料を読み返す，指定された練習問題への回答，報告書の修正

評価方法

心理検査報告書の完成度（50%），課題やディスカッションに対する取り組み・主体性・積極性（50%）

テキスト

片口安史（監修），「ロールシャッハ・テストの学習　片口法スコアリング入門」，金子書房，
ISBN　9784760840083
その他適宜参考書の紹介，資料の配布を行う。

臨床心理基礎実習Ⅰ　　伊里 綾子・藤枝 静暁

授業概要

本科目では，体験学習を通して効果的な臨床心理学的支援を行うための基礎的かかわり技術を習得することを目的とする。ロールプレイングを中心にして，非言語的コミュニケーションや言語的なヘルピング・スキルを用いた実践的かかわりについて指導する。また，これらのスキルを目的を持って意図的に用いることができるよう指導する。

授業計画

第１回	オリエンテーション　本科目の目的と意義，内容の構成，到達点，評価について
第２回	現在使用できているスキルの確認
第３回	ロールプレイング①：非言語的コミュニケーション
第４回	ロールプレイング②：かかわりと傾聴
第５回	ロールプレイング③：開かれた質問・言い換え
第６回	ロールプレイング④：感情についての理解を深める
第７回	ロールプレイング⑤：感情（フィーリング）の反映
第８回	ロールプレイング⑥：その他のスキル・スキルの統合に向けたワーク
第９回	ロールプレイング⑦：模擬カウンセリング
第10回	ロールプレイングに基づく医療分野の面接事例の練習
第11回	ロールプレイングに基づく教育分野の面接事例の練習
第12回	ロールプレイングに基づく子どもとの面接事例の練習
第13回	ロールプレイングに基づく保護者との面接事例の練習
第14回	面接技法の最終確認テスト
第15回	授業のまとめと総合評価

到達目標

1. 心理専門職に求められる基礎的かかわり技術について説明することができる。
2. 模擬面接場面においてヘルピング・スキルを効果的に使うことができる。
3. 援助者役割と被援助者役割の相互体験に基づき，援助機能の意味と効果について自らの言葉で説明することができる。

履修上の注意

1. 本科目は，１回の授業を２コマ連続で実施する。
2. 到達目標を達成するために必要となる実習内容および時間を確保するため，欠席や遅刻，早退は原則として認められない。諸般の事情により出席困難な場合は，必ず事前に承諾を得ること。

予習・復習

授業時間内での学習に十分に取り組むこと。

評価方法

かかわり技術の習得度を評価するために面接技術試験を課す。技術水準が評価基準に満たない場合は，追試験を行う。面接技術試験 70%，授業態度 30%とする。なお，臨床心理基礎実習Ⅰの単位が未修得の場合は、臨床心理基礎実習Ⅱは履修できない。

テキスト

授業内容に関連した参考資料を適宜紹介するとともに，ハンドアウト資料を配付する。

【参考図書】（教科書として購入する必要はありません）

・書　名：ヘルピング・スキル［第２版］探求・洞察・行動（アクション）のためのこころの援助法
・著 者 名：クララ・Ｅ・ヒル著，藤生英行 監訳，岡本吉生・下村英雄・柿井俊昭 訳
・出版社名：金子書房
・出 版 年（ISBN）：9784760832590

臨床心理基礎実習Ⅱ　　佐々木 美恵・大川 一郎

授業概要

本科目では，「臨床心理基礎実習Ⅰ」に引き続き，心理相談業務に必要な知識の修得と技能の向上を目指して指導する。具体的には，インテーク面接から治療契約までの一連の実践プロセスの方法と留意点，およびケース記録や事例検討資料の作成方法について指導したうえで，さらに発展的に，アセスメントとそれに基づくケースの構造化について実践的な指導を行う。

授業計画

第１回	オリエンテーション
第２回	インテーク面接の方法と留意点①―ロールプレイ：インテーク面接
第３回	インテーク面接の方法と留意点②―ロールプレイ：インテーク面接
第４回	アセスメント面接の方法と留意点①―ロールプレイ：アセスメント面接
第５回	アセスメント面接の方法と留意点②―ロールプレイ：アセスメント面接
第６回	治療契約の方法と留意点①―ロールプレイ：治療契約
第７回	治療契約の方法と留意点②―ロールプレイ：治療契約
第８回	ケース記録の取り方，ケース報告の作成方法①―事例検討
第９回	ケース記録の取り方，ケース報告の作成方法②―事例検討
第 10 回	アセスメントとケースの構造化①―アセスメントとケースの全体構造
第 11 回	アセスメントとケースの構造化②―アセスメントにおける心理検査の意味
第 12 回	アセスメントとケースの構造化③―心理検査の標準化の過程
第 13 回	アセスメントとケースの構造化④―事例検討
第 14 回	アセスメントとケースの構造化⑤―事例検討
第 15 回	まとめ（ふり返り，今後の実習に向けて）

到達目標

1．インテーク面接から治療契約までの一連のプロセスについて，その方法と留意点を理解し，説明することができる。
2．ケース記録を適切に作成し，事例検討資料として整えることができる。
3．アセスメントとケースの構造化について，その方法と留意点を理解し，説明することができる。
4．事例検討において，臨床心理学ならびに心理療法の理論に基づいて，自らの考えを述べることができる。

履修上の注意

1．臨床心理基礎実習Ⅰの単位が未修得の場合には，履修は認められない。
2．本科目は，１回の授業を２コマ連続で実施する。
3．到達目標を達成するために必要となる実習内容および時間を確保するため，欠席や遅刻，早退は原則として認められない。諸般の事情により出席困難な場合は，必ず事前に承諾を得ること。

予習・復習

授業時間内での学習に十分に取り組むこと。

評価方法

授業への参加態度（主体性，意欲，誠実さ）50%，事例検討資料の完成度 25%，
各回の小レポート 25%によって評価する。

テキスト

テキストは使用しない。必要な文献は適宜紹介する。

心理実践実習Ａ　羽鳥・伊里・遠藤・大川・佐々木・森・泉水・中谷・藤枝

授業概要

本実習では、臨床心理学的援助の基礎的な実践的技能を習得・向上させることを目的とする。具体的には、学内実習施設において、スーパーヴァイザーまたは実習担当者等の下、①実習前に学習するべき記録方法や心構え、②心理支援を要する者へのコミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援、ニーズの把握、支援計画の作成、チームアプローチ等の知識と技能、③臨床心理士・公認心理師の職業倫理および法的義務、について指導する。

授業計画

本実習では、学内の実習施設(大学附属臨床心理カウンセリングセンター)において、合計 90 時間以上の実習時間が求められる。

(1)包括的事前指導：本実習の内容および全体スケジュールのガイダンス。(２時間)
(2)学内施設実習事前指導：受理面接、カンファレンス資料の作成、ケース担当の心構え、ケース記録等についてガイダンスを行う。(2 時間)
(3)受理面接：スーパーヴァイザーによる指導の下、受理面接を担当する。(６時間以上)
(4)インテーク・カンファレンス資料作成・発表：受理面接後、スーパーヴァイザーによる指導の下(事前事後打合せ含む)、インテーク・カンファレンス資料およびケース記録を作成する。(5 時間以上)
(5)継続的なケース担当：スーパーヴァイザーによる指導(事前事後打合せ含む)の下、継続的に遊戯面接、心理教育面接、臨床心理面接を担当し，ケース記録を作成する。(１２時間以上)
(6)心理検査：スーパーヴァイザーによる指導の下、検査面接への心構えについて事前準備した上で、検査面接を担当し、結果の整理および所見書の作成を行う。(５時間以上)
(7)心理検査所見書作成：スーパーヴァイザーより心理検査所見書作成の指導を受ける。なお，ここにはフィードバックを行うための事前事後指導も含む。(５時間以上)
(8)ケース・カンファレンス資料作成・発表：担当ケースについて、ケース報告をまとめてカンファレンスにおいて発表する。ケース・カンファレンスでは相談員から指導を受ける。(6.5 時間以上)
(9)ケース・カンファレンス出席：定期的に開かれるケース・カンファレンスに積極的に参加し、他者のケース報告に対して議論し、ケースへの理解を深める。(32.5 時間以上)
(10)スーパーヴィジョン：定期的にスーパーヴァイザーから指導を受け、臨床心理学的援助に必要な理論および技法を学ぶ。(14 時間以上)

到達目標

1. 心理支援を要する者のニーズを把握し、アセスメントに基づく心理支援の計画を立てることができる。
2. 心理支援を要する者に，適正な手続きによって心理検査を実施し，所見書の作成，およびフィードバックを行うことができる。
3. 臨床心理士・公認心理師が遵守するべき職業倫理、法的義務を理解することができる。

履修上の注意

1. 法令で義務付けられた実習時間確保のため、欠席、遅刻、早退は原則として認められない。
2. 実習指導マニュアルを熟読し、実習の基本的な流れと留意事項を理解して実習に臨むこと。
3. 実習記録ノートを用いて自らの実習を随時振り返り、主体的に取り組むこと。

予習・復習

授業時間内での学習に十分に取り組むこと。

評価方法

到達目標と照らして、学内実習施設での取り組み(70%)、スーパーヴィジョンへの取り組み(10%)、カンファレンス発表への取り組み(10%)、カンファレンスへの参加態度(10%)の内容によって総合的に評価する。

テキスト

指定しない。

心理実践実習Ｂ　　森 裕幸・中谷 隆子

授業概要

本実習では，臨床心理学的援助の実践的技能を習得することを目的として，福祉分野，司法・犯罪分野，産業・労働分野の学外実習施設において，各施設の実習指導者または実習担当教員等の下で，次の３つの事項について見学・支援実践による実習を指導する。
１．心理支援を要する者への⑴コミュニケーション、⑵心理検査、⑶心理面接、⑷地域支援、⑸理解とニーズの把握および支援計画の作成、⑹ チームアプローチ等の知識と技能の習得
２．多職種連携および地域連携
３．臨床心理士・公認心理師としての職業倫理および法的義務への理解
そのため，学外実習に出向く際には，実習機関の概要や特徴を理解するための事前指導を行い，また実習後は実習によって何を習得できたのかを確認して今後の臨床活動に活かせるように事後指導を実施する。

授業計画

本実習は，福祉分野，司法・犯罪分野，産業・労働分野における①実習に関する事前指導，②学外施設実習，③事後指導によって構成される。事前指導と事後指導には，臨床心理士・公認心理師として身につけておくべき職業倫理や法的知識の指導が含まれる。本実習では，合計で 90 時間以上の実習時間が求められる。

（1）包括的事前指導（3 時間以上）：本実習の内容、全体のスケジュール、施設の概要、各分野の臨床において臨床心理士・公認心理師に求められる役割と実践等について、実習担当教員から説明を受ける。
（2）学外施設実習事前指導（7.5 時間以上）：各分野の現場での実習生の心構え、求められる役割、施設の概要等について実習担当教員から説明を受ける。
（3）学外施設見学実習（31 時間以上）：福祉分野，司法・犯罪分野，産業・労働分野における学外施設の見学実習を行う。
（4）学外施設実践実習（35 時間以上）：福祉分野の学外施設で支援実践実習を行う。毎回，実習後に実習記録を作成し，実習指導者に提出する。定期的に実習指導者と施設担当教員より，実習指導を受ける。
（5）学外施設実習事後指導（7.5 時間以上）：実習担当教員へ実習全体を通して学んだことを報告し、指導を受ける。
（6）総括的事後指導（6 時間以上）：自身の実習内容を振り返り、自身の実習内容を振り返り、学びをまとめ、実習報告会で報告する。実習生同士で学んだことを共有し、実習担当教員から指導を受ける。

到達目標

１．心理支援の実践を行う施設における管理運営の知識、技能を説明することができる。
２．心理支援を要する者に対するアセスメントとそれに基づく心理支援の実践的技能を身につけ，実際の心理支援に活かすことができる。
３．多職種間、地域での連携におけるチームの一員として臨床心理士・公認心理師が果たす役割、知識、技能を実践することができる。
４．臨床心理士・公認心理師が遵守するべき職業倫理、法的義務、および現場での実際的な対応を理解し，心理支援を要する者と適切に関わることができる。

履修上の注意

1．法令で義務付けられた実習時間確保のため、欠席、遅刻，早退は原則として認められない。
2．実習指導マニュアルを熟読し、実習の基本的な流れと留意事項を理解して実習に臨むこと。
3．学外施設での実習にあたっては、社会人としての礼節をもって訪問すること。また、実習施設および実習指導者に敬意を払い、指導方針を遵守すること。
4．実習記録ノートを用いて自らの実習を随時振り返り、主体的に取り組むこと。

予習・復習

授業時間内での学習に十分に取り組むこと。

評価方法

到達目標と照らして、事前指導への取り組み（10%）、学外実習施設における取り組み（70%）、実習記録ノートに基づく事後指導への取り組み（10%）、事後の総括的レポートの内容（10%）によって総合的に評価する。

テキスト

テキストは指定しない。

心理実践実習Ｃ　遠藤・伊里・大川・佐々木・泉水・中谷・羽鳥・藤枝・森

授業概要

本実習では、臨床心理学的援助の実践的技能を習得・向上させることを目的とする。具体的には、学内の実習施設においてスーパーヴァイザーまたは実習担当者等の下、子どもから成人までの心理支援を要する者への心理検査、心理面接等の過程で、心理支援の実践的技能を指導する。また、心理支援を要する者の主訴の背景となる問題点を把握し支援計画を立てる過程で、心理アセスメントへの理解が深まるよう指導する。さらに、スーパーヴィジョンやカンファレンスを通して，臨床心理士・公認心理師としての職業倫理および法的義務について理解し、心理的支援者としての技能が向上するよう指導する。

授業計画

本実習では、学内の実習施設（大学附属臨床心理カウンセリングセンター）において合計で 45 時間以上の実習時間が求められる。

（1）受理面接：スーパーヴァイザーによる指導の下、受理面接を担当する。（3 時間以上）

（2）インテーク・カンファレンス資料作成・発表：受理面接後、スーパーヴァイザーによる指導の下（事前事後打合せ含む）、インテーク・カンファレンス資料およびケース記録を作成する。（5 時間以上）

（3）継続的なケース担当：スーパーヴァイザーによる指導（事前事後打合せ含む）の下、継続的に遊戯面接、心理教育面接、臨床心理面接を担当し，ケース記録を作成する。（6 時間以上）

（4）心理検査：スーパーヴァイザーによる指導の下、検査面接への心構えについて事前準備した上で、検査面接を担当し、結果の整理および所見書の作成を行う。（3 時間以上）

（5）心理検査所見書作成：スーパーヴァイザーより心理検査所見書作成の指導を受ける。なお，ここにはフィードバックを行うための事前事後指導も含む。（3 時間以上）

（6）ケース・カンファレンス資料作成・発表：担当ケースについて、ケース報告をまとめてカンファレンスにおいて発表する。ケース・カンファレンスでは相談員から指導を受ける。（3.5 時間以上）

（7）ケース・カンファレンス出席：定期的に開かれるケース・カンファレンスに積極的に参加し、他者のケース報告に対して議論し、ケースへの理解を深める。（11.5 時間以上）

（8）スーパーヴィジョン：定期的にスーパーヴァイザーから指導を受け、臨床心理学的援助に必要な理論および技法を学ぶ。（10 時間以上）

到達目標

1. 心理支援を要する者のニーズを把握しアセスメントに基づく心理支援の実践的技能を行うことができる。
2. 心理支援を要する者等とコミュニケーションをとり、心理検査や心理面接等を行うことができる。
3. 臨床心理士・公認心理師が遵守するべき職業倫理、法的義務を理解し実際的な対応を行うことができる。

履修上の注意

1. 臨床心理基礎実習Ⅰ・Ⅱの単位が未修得の場合には、履修は認められない。
2. 法令で義務付けられた実習時間確保のため、欠席、遅刻、早退は原則として認められない。
3. 実習指導マニュアルを熟読し、実習の基本的な流れと留意事項を理解して実習に臨むこと。
4. 実習記録ノートを用いて自らの実習を随時振り返り、主体的に取り組むこと。

予習・復習

授業時間内での学習に十分に取り組むこと。

評価方法

到達目標と照らして、学内実習施設での取り組み（70%）、スーパーヴィジョンへの取り組み（10%）、カンファレンス発表への取り組み（10%）、カンファレンスへの参加態度（10%）の内容によって総合的に評価する。

テキスト

指定しない。

臨床心理実習Ⅰ(心理実践実習D)　　泉水 紀彦・羽鳥 健司

授業概要

本実習では、臨床心理学的援助の実践的技能を習得することを目的として、保健医療分野、教育分野の学外実習施設において、各施設の実習指導者または実習担当教員等の下で、次の３つの事項について見学・支援実践による実習を指導する。

１．心理支援を要する者への(1)コミュニケーション、(2)心理検査、(3)心理面接、(4)地域支援、(5)理解とニーズの把握および支援計画の作成、(6)チームアプローチ等の知識と技能の習得
２．多職種連携および地域連携
３．臨床心理士・公認心理師としての職業倫理および法的義務への理解

そのため、学外実習に出向く際には、各実習機関の概要や特徴を理解するために事前指導し、実習によって何を習得できたのかを確認して今後の心理臨床活動に活かせるように事後指導する。

授業計画

本実習では、保健医療分野と教育分野の実習施設における①実習に関する事前指導、②学外施設実習、③事後指導で構成される。事前指導と事後指導には、臨床心理士・公認心理師として身につけておくべき職業倫理や法的知識の指導が含まれる。本実習では、合計で 225 時間以上の実習時間が求められる。

(1)包括的事前指導(2 時間以上)：本実習の内容、全体のスケジュール、施設の概要、各分野の臨床において臨床心理士・公認心理師に求められる役割と実践等について、実習担当教員から説明を受ける。
(2)学外施設実習事前指導(4 時間以上：2 時間×2 施設)：各分野の現場での実習生の心構え、求められる役割について実習担当教員から説明を受ける。
(3)学外施設実践実習(保健医療分野 137 時間以上/教育分野 72 時間以上)：保健医療分野、教育分野の学外施設で支援実践実習を行う。毎回、実習後に実習記録を作成し、実習指導者に提出する。定期的に実習指導者と施設担当教員より、実習指導を受ける。
(4)学外施設実習事後指導(4 時間以上：2 時間×2 施設)：各施設の実習指導者または実習担当教員へ実習全体を通して学んだことを報告し、指導を受ける。
(5)総括的事後指導(6 時間以上)：自身の実習内容を振り返り、学びをまとめ、実習報告会で報告する。実習生同士で学んだことを共有し、実習担当教員から指導を受ける。

到達目標

１．心理支援の実践を行う施設における管理運営の知識、技能を説明できる。
２．心理支援を要する者に対するアセスメントとそれに基づく心理支援の実践的技能を身につけ、実際の心理支援に活かすことができる。
３．多職種間、地域での連携におけるチームの一員として臨床心理士・公認心理師が果たす役割、知識、技能を実践することができる。
４．臨床心理士・公認心理師が遵守するべき職業倫理、法的義務、および現場での実際的な対応を理解し、心理支援を要する者と適切に関わることができる。

履修上の注意

1．臨床心理基礎実習Ⅰ・Ⅱの単位が未修得の場合には、履修は認められない。
2．法令で義務付けられた実習時間確保のため、欠席、遅刻、早退は原則として認められない。
3．実習指導マニュアルを熟読し、実習の基本的な流れと留意事項を理解して実習に臨むこと。
4．学外施設での実習にあたっては、社会人としての礼節をもって訪問すること。また、実習施設および実習指導者に敬意を払い、指導方針を遵守すること。
5．実習記録ノートを用いて自らの実習を随時振り返り、主体的に取り組むこと。

予習・復習

授業時間内での学習に十分に取り組むこと。

評価方法

到達目標と照らして、事前指導への取り組み(10%)、学外実習施設での取り組み(70%)、実習記録ノートに基づく事後指導への取り組み(10%)、事後の総括的レポートの内容(10%)によって総合的に評価する。

テキスト

指定しない。

臨床心理実習Ⅱ

中谷・伊里・大川・佐々木・泉水・羽鳥・藤枝・森

授業概要

本実習では，心理相談・援助業務に必要な実践的知識や技能を習得することを目的として、臨床心理士・公認心理師資格を有する教員によって指導を行う。具体的には，学生が学内の実習施設(大学附属臨床心理カウンセリングセンター)において，倫理規定遵守の下，子どもや成人に対する受理面接，心理査定，心理面接を担当し，スーパーヴィジョンやケース・カンファレンスを通してアセスメントとそれに基づく専門的な心理支援について理解を深めることができるよう指導する。最終的には，担当したケースの心理面接経過をまとめ，事例報告として提出するまで指導する。

授業計画

本実習では，学内の実習施設(大学附属臨床心理カウンセリングセンター)において合計で４５時間以上の実習時間が求められる。

(1)受理面接：スーパーヴァイザーによる指導の下，受理面接を担当する。(３時間以上)

(2)インテーク・カンファレンス資料作成・発表：受理面接後，スーパーヴァイザーによる指導の下(事前事後打合せ含む)，インテーク・カンファレンス資料およびケース記録を作成する。(５時間以上)

(3)継続的なケース担当：スーパーヴァイザーによる指導(事前事後打合せ含む)の下，継続的に遊戯面接，心理教育面接，臨床心理面接を担当し，ケース記録を作成する。(６時間以上)

(4)心理検査：スーパーヴァイザーによる指導の下，検査面接への心構えについて事前準備した上で，検査面接を担当し，結果の整理および所見書の作成を行う。(３時間以上)

(5)心理検査所見書作成：スーパーヴァイザーより心理検査所見書作成の指導を受ける。なお，ここにはフィードバックを行うための事前事後指導も含む。(３時間以上)

(6)ケース・カンファレンス資料作成・発表：担当ケースについて，ケース報告をまとめてカンファレンスにおいて発表する。ケース・カンファレンスでは相談員から指導を受ける。(３.５時間以上)

(7)ケース・カンファレンス出席：定期的に開かれるケース・カンファレンスに積極的に参加し，他者のケース報告に対して議論し，ケースへの理解を深める。(６時間以上)

(8)スーパーヴィジョン：定期的にスーパーヴァイザーから指導を受け，臨床心理学的援助に必要な理論および技法を学ぶ。(６時間以上)

(9)事例報告資料作成・発表：スーパーヴァイザーによる指導の下，担当ケースのうち１ケースの心理面接過程をまとめ，最終成果として資料を作成し，発表する。(９.５時間以上)

到達目標

1.受理面接，心理査定，心理面接等の実践的な心理支援を行うことができる。
2.心理支援に関する倫理規定や守秘義務等について理解し，遵守することができる。
3.スーパーヴィジョンやケース・カンファレンスを通して，アセスメントとそれに基づく心理支援について理解し，実践することができる。
4.心理面接過程を事例報告としてまとめ，発表することができる。

履修上の注意

1.臨床心理基礎実習Ⅰ・Ⅱの単位が未修得の場合には，履修は認められない。
2.到達目標を達成するために必要となる実習内容及び時間を確保するため，欠席，遅刻，早退は原則として認められない。
3.実習指導マニュアルを熟読し，実習の基本的な流れと留意事項を理解して実習に臨むこと。
4.実習記録ノートを用いて自らの実習を随時振り返り，主体的に取り組むこと。

予習・復習

授業時間内での学習に十分に取り組むこと。

評価方法

到達目標と照らして，学内実習施設における取り組み(５０%)，スーパーヴィジョンへの取り組み(１０%)，カンファレンス発表への取り組み(１０%)，カンファレンスへの参加態度(１０%)，事例報告への取り組み(１０%)，事例報告の内容(１０%)によって総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。適宜文献や書籍等を紹介し，資料を配布する。

データ解析法特論　　米村 朋子

授業概要

本科目は，臨床場面で起こる事象への科学的理解と理論的洞察を支えるための研究スキルを身に付けることを目的とし，特に，実証的研究の実施に必要な，得られたデータの解析に使用する統計の知識や様々な分析手法について指導する。具体的には，心理統計法の理論背景(統計的有意性，検定の原理，標本分布など)を学び，適切な心理統計手法を選択および実施するための知識を高める。その上で，主要な統計的手法を用いた研究論文を読んだり，SPSS，HAD および R などに代表される統計ソフトウェアを実際に操作することで，心理学的統計処理を行える実践的スキルを高められるような実習を交えた講義をする。

授業計画

第１回	ガイダンス：データ解析とは
第２回	記述統計の解説と実践
第３回	相関・相関係数の解説と実践
第４回	χ^2 検定・t 検定の解説と実践
第５回	分散分析の解説
第６回	分散分析の実践
第７回	重回帰分析の解説
第８回	重回帰分析の実践
第９回	因子分析の解説
第10回	因子分析の実践
第11回	共分散構造分析の解説
第12回	共分散構造分析の実習
第13回	カテゴリを扱う多変量解析の解説
第14回	カテゴリを扱う多変量解析の実践
第15回	研究倫理
第16回	レポート課題

到達目標

1. 各心理統計に関する理論背景と方法を理解できる。
2. データの特性に応じた適切な分析方法を選択することができる。
3. 統計ソフトウェアを用いて統計処理を行うことができる。

履修上の注意

データ解析にかかわる理論や方法論について，主体的に学ぶ態度をもつこと。

予習・復習

・予習として，各回の授業で扱う内容について，心理統計の基礎知識を理解しておくこと。
　指定のテキストの対応箇所を読んでくることが望ましい。
・復習として，授業で出された課題を復習し，統計手法の習熟に努めること。

評価方法

到達目標と関連して，授業中の発言などの参加度と理解度(50%)，提出されたレポート内容(50%)などを通して総合的に評価する。

テキスト

小塩真司　(2023)　SPSS と Amos による心理・調査データ解析 第 4 版: 因子分析・共分散構造分析まで　東京図書／ISBN：978-4489024085

臨床心理学研究法特論　　宇野 あかり

授業概要

臨床心理学およびその関連領域で用いられる主要な研究法について学ぶ。講義の前半では量的研究法、質的研究法、事例研究法などの主要な研究法に関して講義する。講義の後半では、臨床心理学やその関連領域に関する国際的な学術論文の精読を通して、論理的・批判的思考に基づく最適な研究手法の選択、研究デザインの計画と実践、および論文化までの一連のプロセスに対する理解を深めていく。各研究法の特徴、強み、共通点、相違点などを理解し、自身の研究テーマに取り組む際に、最適な研究デザインを組み立てることができる能力を養うことを目的とする。

授業計画

第１回	オリエンテーション：
第２回	臨床心理学研究とは
第３回	量的研究法
第４回	質的研究法①：質的研究法について
第５回	質的研究法②：M-GTA について
第６回	事例研究法
第７回	その他の研究法について
第８回	臨床心理学研究を行う上で遵守すべき研究倫理
第９回	学術論文の購読および発表、ディスカッション
第10回	学術論文の購読および発表、ディスカッション
第11回	学術論文の購読および発表、ディスカッション
第12回	学術論文の購読および発表、ディスカッション
第13回	学術論文の購読および発表、ディスカッション
第14回	学術論文の購読および発表、ディスカッション
第15回	研究計画の発表およびディスカッション
第16回	レポート

到達目標

1. 臨床心理学およびその関連領域で用いられる各研究法について理解し、その特徴を説明できる。
2. 学術論文を批判的な視点を持って読み、研究成果を検討することができる。
3. 自身の研究テーマに最適な研究手法を選択し、研究デザインを立てることができる。
4. 臨床心理学の研究を進める上で遵守すべき倫理事項について、理解を深め、説明できる。

履修上の注意

受講生は発表担当の回で、自身の関心のある研究テーマに関連した国際的な学術論文の内容についてレジュメを作成し、発表をする。発表内容をもとに全体で、当該論文で用いられている研究手法について批判的・論理的な視点から討議を行う。

予習・復習

・各授業回で扱う内容について、事前に自主学習しておくこと。
・授業で扱われた内容について、文献および参考書などを活用し、理解を深めること。

評価方法

授業中の参加態度（積極性、主体性、意欲など）（40%）、担当発表の内容（適切な論文選択、資料作成、プレゼンテーション）（40%）、レポート（20%）によって総合的に評価する。

テキスト

本授業では特定の教科書は指定しない。参考書については、適宜、授業内で紹介する。

教育心理学特論
（教育分野に関する理論と支援の展開）

藤枝 静暁

授業概要

教育に関わる諸問題について概観すると同時に背景にある原因とそれに対する支援の在り方について理解を深める。具体的には，不登校に関連した話題を中心に，チーム学校、教師の現状、校外機関との連携などの現状を確認すると同時に背景にある教育現場や家庭内に潜む要因について学校現場の実際を紹介しながら講義する。このような取り組みを通して、教育問題についての洞察力を養い，問題の要因を探る能 力を高める。そして問題解決に向けて適切な支援を行う実践的能力を身につけることを目指して講義を進める。

授業計画

第１回	教育心理学に関わる諸問題と支援方法の探求
第２回	学校現場の課題とチーム学校としての支援
第３回	小学校における不登校に関する話題１　コロナ禍前後の不登校状況の変化
第４回	小学校における不登校に関する話題２　コロナ禍以降の不登校児童への対応の変化
第５回	小学校における不登校に関する話題３　コロナ禍以降のオンライン登校の様子
第６回	小学校における不登校に関する話題４　不登校について学校内でできる支援
第７回	小学校における不登校に関する話題５　不登校児童の家庭との連携、支援
第８回	中学校における不登校に関する話題１　コロナ禍前後の不登校状況の変化
第９回	中学校における不登校に関する話題２　コロナ禍以降の不登校児童への対応の変化
第10回	中学校における不登校に関する話題３　コロナ禍以降のオンライン登校の様子
第11回	中学校における不登校に関する話題４　不登校について学校内でできる支援
第12回	中学校における不登校に関する話題５　不登校児童の家庭との連携、支援
第13回	中学校における不登校に関する話題６　不登校生徒の進学先
第14回	不登校の子どもの学校以外の居場所、支援機関
第15回	不登校とはその子の人生において、どのような意味なのか？
第16回	試験

到達目標

1. With コロナの学校現場の現状、起こっている問題に関心を持つことができる。
2. 学校現場で心理的支援が求められる事例、支援方法、校内連携方法などを理解することができる。
3. 議論を通して、問題の背景について洞察を深めることができる。
4. 問題に対する適切かつ実施可能な支援について議論を通して理解を深めることができる

履修上の注意

With コロナの学校現場の最新の情報に関心を持ち、文献検索だけでなく、学校見学などを通して、積極的に理解しようとすること。また、メディア等により報道されている教育および関連する保育、福祉、子育て領域についても常に関心を持ち、情報収集すること。

予習・復習

各回の授業については事前に目を通し調べておくこと。また，各授業の中で分からないことがある場合はそのままにしておかず，質問して理解を図るように努めること。授業の内容によっては，予習・復習を兼ねてレポートを課すことがある。

評価方法

授業への参加意欲と態度(積極性，発表の姿勢)30%，レポート 30%，試験 40%を原則として、総合的に評価します。受講生同士が活発な議論をすることを期待します。

テキスト

初回授業で伝えます。

発達心理学特論
(教育分野に関する理論と支援の展開)

大川 一郎

授業概要

人の生涯の発達における諸課題に焦点をあてて、発達とは何か、発達の中で生じる困りごとに対してどう理解し、支援していったらいいのかということについて、生涯発達的な視点から考えていく。
具体的には、日本や世界がおかれている社会状況や課題について理解した上で、生涯発達における困りごとや対応について概観する。その上で、人の発達を支える要因、発達の諸相について理解を深める。さらに、発達の中で適応するということの意味について考えていく。

授業計画

第１回	オリエンテーション
第２回	現代日本の社会状況と課題
第３回	発達理解における生涯発達的視点
第４回	生涯発達の中での困りごと
第５回	生涯発達における困りごとへの対応：自助・互助・共助・公助
第６回	人の発達を支えるもの１：遺伝と環境
第７回	人の発達を支えるもの２：身体的要因・精神的要因・心理社会的要因
第８回	発達の諸相１：脳
第９回	発達の諸相２：感情
第10回	発達の諸相３：知的機能
第11回	発達の諸相４：関係性
第12回	発達の諸相５：学力
第13回	発達と適応１：適応するということ
第14回	発達と適応２：ライフキャリアということ
第15回	まとめ
第16回	テスト

到達目標

各授業で提供される情報を理解できる。理解した内容について考え、さらにその理解を深められる。その上で、自分なりの視点を持つことができる。

履修上の注意

授業中、適宜、リアクションペーパーに自分の考えをまとめてもらう。また、授業の内容に応じて、グループワークを行うので積極的に参加すること。

予習・復習

講義で扱った内容をさらに深めるため、授業内での資料を読み込み、さらに知りたい内容について自分で調べること。

評価方法

リアクションペーパーの内容（20%），受講態度（10%），テストの結果（70%）を合わせて，総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。
随時資料を配布し，参考文献はその都度紹介する。

人間関係学特論　　高田 圭二

授業概要

本講義では，人間関係の諸問題の中でも特に情動制御とその不全についての理解を深めることを目的とする。具体的には，Gross の情動制御のプロセスモデルや Mennin の情動制御不全モデルを扱い、二つのモデルと社交不安や心配との関連性について講義する。授業では積極的にディスカッションやワークを行うなどアクティブラーニングを取り入れる。情動制御という視点を通して、人間関係についての理解を深められるよう講義を行う。

授業計画

第１回	ガイダンス：講義の目的と目標、授業の進め方について
第２回	情動と情動制御
第３回	情動制御の神経科学的基盤
第４回	Gross の情動制御のプロセスモデル：制御プロセスについて
第５回	Gross の情動制御のプロセスモデル：制御戦略について
第６回	Gross の情動制御のプロセスモデル：社会的文脈
第７回	ディスカッション①
第８回	Mennin の情動制御不全モデル：基本概念について
第９回	Mennin の情動制御不全モデル：メカニズムついて
第10回	Mennin の情動制御不全モデル：不安への影響について
第11回	ディスカッション②
第12回	論文探索
第13回	論文探索
第14回	発表
第15回	発表
第16回	レポート課題

到達目標

- 取り扱った情動制御の理論について説明できる。
- 情動制御と社交不安や心配の関連を説明できる。
- 情動制御の視点から対人関係上の問題点とその解決方法を提案できる。

履修上の注意

- 授業内にアクティブラーニングを取り入れるため、積極的に議論やワークに取り組むこと。主体的な姿勢で臨んで欲しい。
- 授業の内容は、履修状況等をみて変更することがある。

予習・復習

- 授業資料の他に参考資料を配布するので目を通しておくこと。わからないことがある場合には質問をして疑問を解消すること。

評価方法

- 授業内のディスカッション後のレポート６０％（３０％×２回）
- 発表態度１０％
- 期末レポート３０％

テキスト

- 指定しない。資料及び文献を配布する。

心身医学特論
(保健医療分野に関する理論と支援の展開)

※担当者未定

授業概要

授業計画

第１回	
第２回	
第３回	
第４回	
第５回	
第６回	
第７回	
第８回	
第９回	
第10回	
第11回	
第12回	
第13回	
第14回	
第15回	
第16回	

到達目標

履修上の注意

予習・復習

評価方法

テキスト

精神医学特論
(保健医療分野に関する理論と支援の展開)

柴田 勲

授業概要

精神医学における主な精神障害の概念、治療的な面接法、薬物療法など、精神医学全般にわたる講義を行う。それを踏まえて精神医学の中でも臨床上特に重要な位置を占める統合失調症、うつ病、認知症を中心に、実際の臨床場面で患者・家族にどのように接すればよいかという観点から、精神疾患に関する実践的な知識や対応能力が身に付くように講義する。

授業計画

第 1 回	神経系の解剖、情報伝達と機能について
第 2 回	精神障害の概要ー診断基準ー
第 3 回	精神保健福祉法について
第 4 回	統合失調症の症状と経過
第 5 回	統合失調症の治療
第 6 回	統合失調症の事例検討
第 7 回	うつ病・躁うつ病の症状と経過
第 8 回	うつ病・躁うつ病の治療
第 9 回	認知行動療法の実践
第 10 回	うつ病・躁うつ病の事例検討
第 11 回	認知症の症状と経過
第 12 回	認知症の治療
第 13 回	認知症の事例検討
第 14 回	社会環境の変化と精神疾患の関係について
第 15 回	精神医学特論のまとめ

到達目標

1．精神医学の中心概念について深く理解する。
2．精神医学的な面接法や精神療法について深く理解できる。
3．臨床上特に重要な精神障害についての理解を深め、実践的な対応能力を習得できる。
4．社会や文化と精神医学の関わりを幅広く理解できる。

履修上の注意

1．各自が臨床的・実践的な関心や問題意識をもって授業に出席するとともに、関連領域の書籍や論文を自発的に読み進むことが望ましい。
2．講義に際しては、様々な臨床場面を想定して、実際にどのように患者・家族に対応したらよいかという事例的な検討が頻回になされるので、積極的に参加・発言する姿勢が期待される。

評価方法

到達目標と関連して、授業中の発言などの参加度と理解度(40%)、提出されたレポート内容（60%）などを通して総合的に評価する。

テキスト

DSM5: 精神障害/疾患の診断・統計マニュアル　第５版
講義内容に関連した参考文献や資料をその都度紹介・配布する。

犯罪・非行心理学特論
(司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開)

古曳 牧人

授業概要

臨床心理士・公認心理師として司法・犯罪分野において心理的支援を行うに当たって必要な各種の心理学的理論や研究結果について講義する。特に、犯罪者や非行少年に対するアセスメントと心理的支援を中心に、司法・犯罪分野における心理職の実践がどのように行われているかについて講義する。

なお、この科目は、公認心理師試験を受験するために必要な科目であり、臨床心理士資格審査の受験においては、C 群の選択必修科目の一つである。

授業計画

第１回	司法・犯罪領域における心理学の特徴
第２回	刑事司法制度と犯罪・非行の現状
第３回	司法・犯罪領域における心理職・司法面接
第４回	犯罪・非行に関する心理学的理論
第５回	知能、パーソナリティ特性の査定の実際
第６回	反社会性パーソナリティ障害と素行症
第７回	再犯・再非行要因に関する研究
第８回	再犯・再非行のリスクアセスメント
第９回	リスク・ニード・レスポンシビィティ原則
第10回	依存・嗜癖
第11回	リラプス・プリベンション
第12回	自助グループ・動機付け面接法
第13回	刑事施設・少年院における指導・教育の実際
第14回	犯罪被害者の心理
第15回	犯罪被害者に対する支援
第16回	期末レポート

到達目標

1　臨床心理士・公認心理師として、司法・犯罪の分野で業務を行う上で必要な知識を身に付ける。
2　司法・犯罪領域における心理職の実践を理解する。

履修上の注意

疑問点があれば積極的に質問するなど、授業に積極的に参加することを期待する。

予習・復習

授業で紹介した資料、文献、参考図書等を用いて、特に復習に努めること。

評価方法

レポートの内容 70%、授業における積極性 30%の割合を基本として、総合的に評価する。

テキスト

テキストは指定しない。資料は必要に応じて配付する。
参考図書：
「司法矯正・犯罪心理学特論ー司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開ー」　橋本和明
NHK 出版　2020 年　ISBN: 978-4595141317
「犯罪心理学事典」 日本犯罪心理学会編　丸善出版　2016 年　ISBN: 978-4621089552

健康心理実践特論
（心の健康教育に関する理論と実践）

遠藤 寛子

授業概要

心身の健康に関する心理学的な支援方法について修得できるよう講義する。具体的には，健康心理学の歴史を概観し，ストレスマネイジメントに代表される心の健康を維持する心理教育的支援の理論の理解を目指すため，実践を通して講義する。また，感情ならびにパーソナリティについての理解につながるよう，心身の健康に関する心理教育と理論と方法を紹介する。

授業計画

第１回	オリエンテーション
第２回	健康心理学の歴史
第３回	ストレスとは何か
第４回	対処行動，認知面へのアプローチ
第５回	ソーシャルサポートと健康
第６回	自己開示と健康
第７回	パーソナリティと健康
第８回	感情と健康：感情の役割
第９回	急性ストレス・災害からの回復支援
第10回	生活習慣の改善の支援
第11回	いじめ対策への支援
第12回	マインドフルネス
第13回	セルフ・コンパッション
第14回	健康増進を目指す様々な心理療法
第15回	身体を意識した様々な心理療法
第16回	レポート課題

到達目標

1．健康心理学に関する理論を説明できる。
2．心身の健康教育に関する実際の方法を理解できる。

履修上の注意

1．本講義は公認心理師資格の指定科目である。
2．体験を通した理解を行ってもらうため，積極的な関与を求める。

予習・復習

参考図書等を紹介するので，各自で発展的な学習を進めることを期待する。

評価方法

到達目標と関連して、授業中の発言などの参加度と理解度(30%)、提出されたレポート内容（70%）などを通して総合的に評価する。

テキスト

講義にて適宜紹介する。

心理療法特論　　羽鳥 健司

授業概要

心理療法の技法には様々なものがあるが、中でも欧米では認知行動療法が最も広く知られている。日本でも認知行動療法は注目されてきており、様々な疾患や生活習慣等に対して高い効果があるという多くのエビデンスが示されている。本講義では、認知行動療法の基本的な考え方や、実施するために必要な実践的な基礎的スキルの習得を目的とする。

授業計画

第１回	ガイダンス
第２回	認知行動療法で扱う「心」の要素
第３回	治療的援助の順序
第４回	共感技法
第５回	情報を得るための質問技法と誘導するための質問技法
第６回	自動思考、条件信念、中核信念
第７回	心理教育
第８回	事例定式化
第９回	目標設定
第10回	週間活動記録と個人実験
第11回	問題解決技法
第12回	階層表の作り方
第13回	認知再構成
第14回	全技法を使ったロールプレイ
第15回	まとめ
第16回	レポート

到達目標

１．認知行動療法の考え方を理解し、実践できるようになるための方法を習得する。
２．問題をアセスメントし、認知行動療法が適用できるかどうか判断できる。

履修上の注意

ガイダンスに出席しなかった場合は受講を認めない。また、ガイダンスの時に伝える約束事を必ず守る事。自己都合による欠席、または無断欠席のいずれかが一度でもあった場合は、それ以降の受講を認めない。

評価方法

授業内での理解度（30%）、参加度（30%）、提出されたレポート内容（40%）等によって総合的に評価する。

テキスト

資料を配布する。

障害者（児）心理学特論
（福祉分野に関する理論と支援の展開）

森 裕幸

授業概要

本授業では，障害児・障害者臨床、福祉分野において「臨床心理士」および「公認心理師」として支援を行う上で必要な知識を習得するとともに、支援やアセスメント方法について演習を通して技能を習得することを目的とする。特に、近年関心が高くなっている自閉スペクトラム症・ADHDを中心とした発達障害の特徴と支援について理解を深めていきます。

授業計画

第１回	オリエンテーション：障害児・障害者に対する心理の専門家のかかわり
第２回	障害児・障害者と発達、障害児・障害者臨床で知っておきたい理論や概念
第３回	神経発達症の概論的理解と支援方法
第４回	自閉スペクトラム症の理解と支援（1）
第５回	自閉スペクトラム症の理解と支援（2）
第６回	障害児・障害者臨床とアセスメント：アセスメントの流れ
第７回	障害児・障害者臨床とアセスメント：自閉スペクトラム症のアセスメント（1）
第８回	障害児・障害者臨床とアセスメント：自閉スペクトラム症のアセスメント（2）
第９回	障害児・障害者臨床とアセスメント：適応行動のアセスメント（1）
第10回	障害児・障害者臨床とアセスメント：適応行動のアセスメント（2）
第11回	障害児・障害者臨床とアセスメント：適応行動のアセスメント（3）
第12回	ペアレント・トレーニング／ペアレント・プログラム（1）：基礎的理論
第13回	ペアレント・トレーニング／ペアレント・プログラム（2）：行動の分類
第14回	ペアレント・トレーニング／ペアレント・プログラム（3）：肯定的注目
第15回	ペアレント・トレーニング／ペアレント・プログラム（4）：無視

到達目標

⑴ 障害児・障害者臨床における基本的な知識を理解し、説明できる。
⑵ 障害児・障害者臨床、福祉分野における心理師の役割を説明できる。
⑶ 障害児・障害者臨床、福祉分野において求められるアセスメント方法を理解することができる。
⑷ 神経発達症の特性について理解するとともに、特性に合わせた支援方法を理解することができる。

履修上の注意

・本授業は講義及び演習形式により行います。PC を用いて演習問題に取り組むことがあります。
・演習形式の授業では、個人及びグループワークが中心となります。
・演習形式の授業では、授業時間外に取り組む課題があります。

予習・復習

予習：「授業計画」に記載してある各回の授業テーマやキーワードについて調べ、まとめておくこと。
事後学習：授業内容について振り返りを行い、配布資料を復習すること。理解できなかった点、わからなかった点は調べておくこと。

評価方法

⑴授業態度及び参加状況(ワーク、コメント、ロールプレイなど)：20%
⑵小テスト 20%
⑶レポート：60%（20%×3 回）

テキスト

特に指定はしません。
参考図書：
・障害児・障害者心理学特論〔改訂新版〕：福祉分野に関する理論と支援の展開
・著者：大六 一志（著），山中 克夫（著）
・出版社: 放送大学教育振興会
・ISBN：978-4595141133

学校臨床心理学特論　　中谷 隆子

授業概要

学校臨床心理学とは，学校という場において展開される臨床心理学的支援に関する知識・技術体系のことをいいます。本授業では，スクールカウンセリングの観点を主軸とし，子ども・保護者・教師が学校教育過程で出会う様々な問題への心理臨床学的援助に関する基本的な知識や技術を概説します。次に，各テーマに沿った最新の学術研究・文献購読及び事例検討を行い，現代の学校を取り巻く問題やその援助の実際について理解を深め，実践的技能を高めることができるよう、臨床心理士・公認心理師・学校心理士資格を有する教員によって講義を行います。

授業計画

第１回	オリエンテーション　～授業の目的と進め方の説明～
第２回	学校臨床心理学とは　～学校という場での臨床心理学的援助，意義と課題～
第３回	スクールカウンセリングの概要①　～歴史と実際，３段階の援助サービス～
第４回	スクールカウンセリングの概要②　～チーム学校，アセスメントと援助の過程～
第５回	スクールカウンセリングの概要③　～学校を取り巻く諸問題～
第６回	発達障害への理解と支援の実際①　～文献購読～
第７回	発達障害への理解と支援の実際②　～発表と討論～
第８回	不登校への理解と支援の実際①　～文献購読～
第９回	不登校への理解と支援の実際②　～発表と討論～
第10回	いじめへの理解と支援の実際①　～文献購読～
第11回	いじめへの理解と支援の実際②　～発表と討論～
第12回	非行への理解と支援の実際①　～文献購読～
第13回	非行への理解と支援の実際②　～発表と討論～
第14回	虐待への理解と支援の実際①　～文献購読～
第15回	虐待への理解と支援の実際②　～発表と討論～
第16回	まとめ

到達目標

到達目標は，以下の２点とします。
①現代の学校を取り巻く諸問題への理解と臨床心理学的支援の実際について理解を深め，説明できる
②諸問題に対する見立てや支援計画について，各受講生及び教員と積極的にコミュニケーションをとりながら検討できる

履修上の注意

本講義では，以下の点にご留意ください。
・授業への大幅な遅刻や早退は欠席とみなすことがあります
・他の受講生が授業を受ける権利を奪う行為を禁止します
・主にグループワーク，討論によって授業が進みますので，主体的・積極的な参加態度が求められます
・学校を取り巻く諸問題の支援者として，多角的な視点や技術を獲得する意欲があること
・毎回の講義後にリアクションペーパーを提出して頂きます

予習・復習

授業で配布される資料や検索した文献・参考図書・視覚教材を用いることはもちろん，授業中に行ったグループワークや討論によって得た体験を振り返ることによって，予習・復習を主体的に行い，学びを深めること。授業中に取り扱ったテーマや学校教育全般に関連する最新ニュース及びご自身の体験に関心を向けること。

評価方法

授業参加態度（20%），リアクションペーパー（30%），期末レポートや試験（50%）によって評価する。

テキスト

特に指定しません。適宜授業中に参考図書を紹介します。

グループ・アプローチ特論
(家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践)

藤枝 静暁

授業概要

本授業の目標は、心理専門職者が行うグループ・アプローチがどのようなものであるかについて理解することである。新たに誕生した国家資格「公認心理師」がどのような分野で、どのようなグループに対して支援や援助を行うのかについて、具体例を取り上げながら講義する。具体的には、①深刻な病にある者、精神障害者、不登校児童生徒、育児不安と産後鬱病を患っている母親などとその家族における家族内のグループダイナミクスに焦点をあてた心理支援、②引きこもり、認知症などを患っている高齢者など地域に基づいた支援が必要な人たちへの心理的援助のあり方、③地域の学校や保育所、施設などに勤めている教職員への心理的援助などを取り上げる。授業では、テキストや資料の解説の他に、集団討論やロールプレイなどを行いながら、より実践的に学びを深めていく。

授業計画

第１回	ガイダンス：授業の方針と受講者の心得について
第２回	講義：グループ・アプローチの歴史と現状
第３回	講義：不登校の子どもとその家族を対象としたグループ・アプローチの実際と課題
第４回	講義：貧困、経済的課題のある家族へのグループ・アプローチの実際と課題
第５回	講義：認知症などを患う高齢者とその家族へのグループ・アプローチの実際と課題
第６回	講義：地域における子育て支援を目的としたグループ・アプローチの実際と課題
第７回	講義：産後鬱の予防と回復を目的としたグループ・アプローチの実際と課題
第８回	講義：教師や保育者の支援を目的としたグループ・アプローチの実際と課題
第９回	講義：グループ・アプローチの技法である SST の理論①
第 10 回	演習：グループ・アプローチの技法である SST の理論②
第 11 回	講義：グループ・アプローチの技法である SST の演習①
第 12 回	演習：グループ・アプローチの技法である SST の演習②
第 13 回	講義：グループ・アプローチの技法である SST の演習③
第 14 回	演習：グループ・アプローチの技法である SST の演習④
第 15 回	全体のふり返りと質疑応答
第 16 回	期末試験

到達目標

グループ・アプローチについて理論的に理解することができる
SST に参加し、メンバーとファシリテーターの両方の役割を体験学習し理解することができる

履修上の注意

１．本授業は公認心理師を目指す場合の必須科目です。
２．授業ではグループ・アプローチの事例等を取り上げます。その際、倫理上の配慮が発生しますので、受講者はプライバシー保護の意識をもって受講に臨んでください。

評価方法

成績評価は、学期末試験 20%、授業内課題 30%、演習への参加態度 50%とします。

テキスト

初回授業で指示します。

産業・組織心理学特講
(産業・労働分野に関する理論と支援の展開)

原 恵子

授業概要

産業心理学(産業・組織心理学)とは産業における人間行動を研究し，人と産業との適正な関係性の構築や発展を目指している。人と組織との関係性や組織の中で働くときの人の行動の特長やその背景にある心理状態も扱う。産業・組織心理学での主要な概念や理論を紹介するとともに，テーマに関連するケース検討や実践的な演習も授業内に行う。産業・労働分野に関わる公認心理師・臨床心理士の責務・実践に関する習得を目指す。

授業計画

第１回	オリエンテーション，産業・労働分野での責務，産業・組織心理学とは
第２回	産業社会の変化と社会的自立(学校から職場へのシフト，働くこととは)
第３回	人的資源管理(採用と面接、適性、人材育成、人事評価)
第４回	組織への参入と組織構成員の心理・行動(組織社会化，組織市民行動，組織コミットメント，職務満足)
第５回	職場集団のダイナミズムとコミュニケーション
第６回	職場におけるリーダーシップ(リーダーシップ理論)
第７回	仕事への動機づけ①(ワーク・モチベーション理論)
第８回	仕事への動機づけ②(個人と組織との共生、メンタリング、キャリアカウンセリング)
第９回	職業生活を通したキャリア発達①(多様な役割の発達、職業興味アセスメント)
第10回	職業生活を通したキャリア発達②(偶然の有用性、転機、ナラティブ・アプローチ)
第11回	安全衛生と心身の健康①(職場のストレス、ストレスチェック制度)
第12回	安全衛生と心身の健康②(復職支援、職場でのハラスメント)
第13回	安全衛生と心身の健康③(安全，その他)
第14回	産業・労働分野での心理師(士)の責務や実践
第15回	総括
第16回	筆記試験

到達目標

・産業・組織心理学の主要概念を組織と個人の視点から理解することができる。
・組織内で起きている様々な現象や問題について理解することができる。
・職場におけるメンタルヘルスやキャリア形成などの現代的なテーマを理解し，実践に応用できる。
・産業・労働分野に関わる公認心理師・臨床心理士の責務を理解し，実践に応用できる。

履修上の注意

講義だけではなく，グループ討議やケース検討，個人ワークなど学生参加型の学修時間があることを理解したうえで履修すること。講義での積極的な発言や，学生同士の相互協力も務めること。30 分以上の遅刻は欠席扱い(電車遅延など合理的理由がある場合は，証明書の提出を)。受講学生の希望や状況，理解度により，授業計画の順番を入れかえることや内容を一部変更することもある。

予習・復習

授業資料データは事前に公開するため，予習・復習に役立てること。
事前課題を設定する回や，発表準備が必要な回もある。

評価方法

授業内レポート 30%，中間レポート 20%，定期試験 50%を総合的に判断する。

テキスト

教科書指定はなし。授業用資料を毎回配布し，参考図書を適宜紹介する。

特別課題研究Ⅰ　　大川 一郎

授業概要

指導学生のテーマに沿って、修士論文作成に求められる研究スキルの習得を図る。具体的には、文献検索能力と文献レビュー能力の開発、研究課題に関連する最新の専門知識及び研究方法の習得である。

春期では、構想発表会に向けての研究テーマの絞り込みとプレゼンテーション・スキルの習得、研究計画の実施に向けた討論などを行う。秋期では、春期での成果を踏まえて、各自の研究テーマを深め、中間発表に向けての研究計画の吟味と予備調査、本調査に向けての準備、実施、データの分析と考察、文献レビューの補強など、２年次の修士論文の完成に向けた指導を行う。

授業計画

＜前期＞		＜後期＞	
1	修士論文作成プロセスに関するガイダンス	1	春期の振り返りと秋期の達成目標の確認
2	２年間のカリキュラムの進め方について	2	研究計画の発表（１）：構想の検討
3	１年次の取組みと達成目標について	3	研究計画の発表（２）：構想発表の予行演習
4	研究課題の発表（１）問題点の吟味	4	構想発表会事後指導：問題点の振り返り
5	研究課題の発表（２）課題の絞り込み	5	研究計画の吟味（１）：概念モデルの再検討
6	研究課題に関する文献検索	6	研究計画の吟味（２）：分析モデルの検討
7	データベースの利用法、検索法を学ぶ	7	研究計画の吟味（３）：分析モデルの再検討
8	先行研究論文の発表と討論（１）	8	予備調査の設計（１）：調査票の作成
9	先行研究論文の発表と討論（２）	9	予備調査の設計（２）：対象・方法の確認
10	先行研究論文の発表と討論（３）	10	予備調査の設計（３）：実施準備
11	研究の進捗状況の確認（１）	11	予備調査の設計（４）：調査実施
12	研究の進捗状況の確認（２）	12	予備調査の結果分析（１）：データ吟味
13	研究の進捗状況の確認（３）	13	予備調査の結果分析（２）：結果分析
14	研究テーマの吟味	14	本調査に向けた問題点の整理（１）
15	春期のまとめ	15	本調査に向けた問題点の整理（２）

到達目標

（1） 各自の研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
（2） 各自の研究テーマを内外の先行研究と関連づけて、深めることができる。
（3） 各自の研究テーマに即した方法論を展開できる。
（4） 各自の研究テーマに即した研究計画を作成、実施することができる。
（5） 各自の研究テーマについて、簡潔明瞭にプレゼンテーションを行うことができる。

履修上の注意

学術的意義とともに、人々の福祉に貢献するという問題意識を持って、主体的に研究に取り組むことが求められる。

特別課題研究は、2 年にわたる修士論文完成を最終目標としている。そのためには日々の着実な課題への取り組みが必要であるが、そのためにも日々の心身の健康に留意することが求められる。

予習・復習

予定される課題を確実に仕上げ、終了後は、授業内容を反復し、修正を行うこと。

評価方法

論文作成への取り組みの姿勢・意欲（40%）、発表の態度（30%）進展状況（30%）によって評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて適宜紹介する。

特別課題研究Ⅰ　　藤枝 静暁

授業概要

今日における心理臨床を中心とした課題を概観し、自分の興味関心を広げるとともに、問題の所在と研究テーマを明らかにする。研究テーマに則した研究計画および研究方法を立案する。そのために、国内外の先行研究の収集、先行研究のレビューを通じてこれまでの成果と今後の課題の明確化、研究上の倫理的配慮などへの理解を深める。

中間発表に向けて、先行研究のレビューの増強、研究計画と研究方法の精度の向上、必要に応じて予備的研究を実施する。全員が発表と討論に参加し、プレゼンテーション力やクリティカルな読解力や思考力を獲得できるよう指導する。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成に関する総合ガイダンス	1	第１回　秋期ガイダンスと秋期の達成目標について
2	２年間のカリキュラムと見通しについて	2	アンケート調査の実施、被験者への依頼などにおける倫理的配慮と注意点
3	１年次の見通しと達成目標について	3	研究目的の立案①：予備的検討
4	研究テーマの立案①：教育分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	4	研究目的の立案②：問題と目的の明確化
5	研究テーマの立案②：福祉分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	5	研究方法の立案①：既存の概念モデルの提示
6	研究テーマの立案③：医療分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	6	研究方法の立案②：研究方法の検討
7	論文検索データベースの利用方法、論文検索方法を学ぶ	7	研究方法の立案③：仮説と分析方法の検討
8	研究テーマに関わる学術論文の検索と収集①：日本語文献を中心に	8	研究方法の立案④：倫理的検討
9	研究テーマに関わる学術論文の検索と収集②：英語文献を中心に	9	予備調査の依頼対象、依頼方法、調査内容の発表と検討
10	教育分野に関連した先行研究の発表と討論	10	予備調査の依頼対象、依頼方法、調査内容の確認
11	福祉分野に関連した先行研究の発表と討論	11	予備調査の実施
12	医療分野に関連した先行研究の発表と討論	12	予備調査の結果回収と分析
13	研究テーマの絞り込み	13	予備調査結果の検討
14	研究を行う上での倫理的配慮	14	予備調査で得られた成果のまとめ
15	春期のまとめと研究進捗状況の確認	15	第１回中間発表にむけた研究計画の吟味と修正

到達目標

1．研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
2．先行研究の成果と課題を踏まえて、研究テーマを明確化させることができる。
3．研究テーマに沿った研究計画および研究方法を確立することができる。
4．研究テーマに沿った論文作成能力を獲得することができる。

履修上の注意

学術的な意義および教育・福祉・医療の臨床現場における実践力を向上させることを念頭に置きながら主体的かつ意欲的に研究に取り組むこと。

評価方法

課題への主体的取り組みとその内容について評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する。

特別課題研究Ⅰ　佐々木 美恵

授業概要

修士論文作成に向けて，次のステップに沿って指導する。（１）研究課題に基づいて先行研究をレビューし、研究課題の具体化を図る。（２）先行研究のレビューを進めながら、自らの研究の位置づけを図り、実行可能な研究デザイン立案を行う。（３）研究デザインの具体化を図り，必要に応じて予備調査，あるいは予備的研究を実施する。（４）予備的検討を踏まえて、本調査の準備を進める。

また，春期の構想発表会，および秋期の第１回中間報告会の事前・事後指導を行う。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
1	研究課題についての討論	1	研究デザインの構想⑤
2	研究課題の具体化/先行研究レビュー①	2	研究デザインの構想⑥
3	研究課題の具体化/先行研究レビュー②	3	研究デザインの構想⑦
4	研究課題の具体化/先行研究レビュー③	4	研究デザインの構想⑧
5	研究課題の具体化/先行研究レビュー④	5	研究デザインの立案①
6	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑤	6	研究デザインの立案②
7	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑥	7	研究デザインの立案③
8	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑦	8	研究デザインの立案④
9	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑧	9	研究デザインの立案⑤
10	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑨	10	予備調査・予備的研究準備①
11	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑩	11	予備調査・予備的研究準備②
12	研究デザインの構想①	12	予備調査・予備的研究準備③
13	研究デザインの構想②	13	予備調査・予備的研究実施/データ分析①
14	研究デザインの構想③	14	予備調査・予備的研究実施/データ分析②
15	研究デザインの構想④	15	予備調査・予備的研究実施/データ分析③

到達目標

1．研究課題を明確化し，先行研究のなかに位置づけることができる。
2．実行可能な研究デザインを立案することができる。
3．適正な手続きに基づいて，予備調査・予備的研究を実行することができる。

履修上の注意

自ら主体的，積極的に取り組むこと。

予習・復習

予習：疑問点・討論点を整理する。
復習：授業内での指導を踏まえて研究を進める。

評価方法

研究デザイン立案の到達度 80%，取り組み態度（主体性，意欲）20%によって評価する。

テキスト

テキストは使用しない。必要な文献は適宜紹介する。

特別課題研究Ⅰ　　羽鳥　健司

授業概要

明らかにしたい臨床心理学的な現象を特定し、おおまかな研究テーマを決定できるように指導する。次に、関連する最新の先行研究をレビューし、研究テーマとの関係性を検討させる。さらに、議論を通して詳細な研究テーマを決定し、測定や分析の方法も含めて、研究全体の計画を立て、予備調査を実施するよう指導する。その後も、引き続き、必要な先行研究のレビューを行い、指導する。

授業計画

到達目標

1．究明したい現象を臨床心理学的に位置づける能力を身につける。
2．研究テーマに関連する先行研究を検索し、研究テーマとの異動を検討することができる。
3．研究テーマを表現するための方法論を身につける。
4．研究テーマを論理的に論述し、論文を作成することができる。
5．研究テーマをプレゼンテーションすることができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成の概要	1	授業のガイダンスと秋期の到達目標の説明
2	修士論文完成までの見通しについて	2	研究の実施に関連する倫理的配慮について
3	１年次の到達目標に関する説明	3	研究計画の発表（1）：到達点の確認
4	各自の研究テーマの発表（1）：	4	研究計画の発表（2）：問題点の検討
5	各自の研究テーマの発表（2）：テーマの絞り込み	5	研究計画の発表（3）：研究目的について
6	先行研究の検索方法を学習する。	6	研究計画の発表（4）：方法論について
7	各自のテーマに関連する先行研究の検討（1）：歴史的に重要な文献を中心に	7	研究計画の発表（5）：概念モデルの検討
8	各自のテーマに関連する先行研究の検討（2）：最新の研究を中心に	8	研究計画の発表（6）：実験計画の策定
9	先行研究と各自のテーマとの関連について（1）：相違点の検討	9	研究計画の発表（7）：分析方法の検討
10	先行研究と各自のテーマとの関連について（2）：類似点の検討	10	研究計画の発表（8）：予備データ取得の依頼と回収
11	研究の進捗状況確認（1）：研究テーマの吟味	11	予備調査の実施と結果の発表（1）：取得した予備データの検討と入力
12	研究の進捗状況確認（2）：研究テーマの修正	12	予備調査の実施と結果の発表（2）：予備分析結果の発表
13	研究の進捗状況確認（3）：研究テーマの確認	13	中間発表にむけて（1）：デザイン修正個所の確認
14	研究テーマの絞り込み	14	中間発表にむけて（2）：デザインの修正
15	春期のまとめ	15	秋期のまとめ

履修上の注意

各自の関心のみに基づいた研究を行うのではなく、実施する研究の学術的および社会的意義がどのようなものなのかを常に意識し、研究参加者の利益が守られるよう謙虚な姿勢で研究に取り組むことが求められる。

評価方法

研究課題への積極的な取り組み、およびその内容について評価する。

テキスト

適宜紹介する

特別課題研究Ⅰ　　原 恵子

授業概要

修士論文作成に必要な技能を習得する。産業・労働分野における課題を概観し，自身の興味・関心を広げ，研究テーマを明らかにし，研究テーマを踏まえた研究計画を立案する。具体的には，先行研究レビュー，研究テーマの絞り込み，研究上の倫理的配慮，研究計画の立案，予備調査とデータ分析を指導する。

春期は，構想発表会に向けた指導を行う。秋期は，構想発表会を通した指導や２年次の修士論文に向けた指導を行う。思考力や論理力，プレゼンテーションスキルの習得・向上を目指した指導をする。

授業計画

＜前期＞		＜後期＞	
1	指導方針の説明，指導教員の研究紹介	1	春期のふりかえりと秋期の目標の確認
2	修士論文作成プロセスと２年間の進め方	2	研究構想の検討
3	１年次の目標設定	3	研究構想の発表(構想発表の準備)
4	受講生の関心領域の発表①	4	構成発表会の事後指導
5	受講生の関心領域の発表②	5	研究方法の検討①
6	先行研究の検索方法	6	研究方法の検討②
7	研究テーマの検討と討論	7	研究方法の検討③
8	先行研究の発表と討論①	8	研究方法の発表
9	先行研究の発表と討論②	9	予備調査の実施①
10	先行研究の発表と討論③	10	予備調査の実施②
11	先行研究の発表と討論④	11	予備調査の実施③
12	先行研究の整理と発表	12	予備調査の分析①
13	研究テーマの絞り込み	13	予備調査の分析②
14	研究テーマの吟味	14	予備調査の発表とふりかえり
15	春期のまとめ，研究進捗状況の確認	15	秋期のまとめ，次年度準備

到達目標

(1)各自の研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
(2)先行研究を踏まえて，研究テーマを深めることができる。
(3)研究テーマに即した研究計画を作成し，予備調査を実施することができる。
(4)研究テーマに沿った，論文作成能力やプレゼンテーションスキルを習得する。

履修上の注意

学術的な意義および，社会や人々の福祉に貢献するという意識を持ち，主体的かつ意欲的に研究に取り組むこと。研究活動における教員や仲間との関係性や討論を，貴重な機会として認識すること。

予習・復習

各回のテーマや課題に，確実に誠実に取り組むこと。

評価方法

修士論文作成に向けた主体的な取り組み(30%)とその内容(70%)について，総合的に評価する。

テキスト

テキストの指定はない。必要な文献や書籍は適宜紹介する。

特別課題研究Ⅰ　遠藤 寛子

授業概要

心理学の視点や理論を臨床にどう役立てられるかを意識し研究計画を立てられるよう指導する。詳細には、先行研究に関わる文献購読を行い、研究発表の仕方を学び、そして研究テーマを洗練していく。また、研究構想を練り、目的、方法の精緻化につながるよう指導する。
前期では、関心領域に沿った文献検索の方法を知り、討論をしながら研究テーマを具体化させる。後期では、実際に予備実験・調査を実施できるよう指導する。

授業計画

＜前期＞		＜後期＞	
1	修士論文の作成に向けてのガイダンス	1	前期の振り返りと後期の目標
2	２年間のカリキュラムの見通し	2	研究構想の検討（1）
3	１年次の取り組みと目標	3	研究構想の検討（2）
4	研究課題の発表と課題（1）	4	構想発表事後指導
5	研究課題の発表と課題（2）	5	問題と目的の検討
6	文献検索とその方法	6	研究方法の検討（1）
7	先行研究論文の発表と討論（1）	7	研究方法の検討（2）
8	先行研究論文の発表と討論（2）	8	研究方法の検討（3）
9	先行研究論文の発表と討論（3）	9	研究方法の検討（4）
10	先行研究論文の発表と討論（4）	10	予備実験・調査の実施（1）
11	先行研究論文の発表と討論（5）	11	予備実験・調査の実施（2）
12	研究テーマの具体化と討論（1）	12	予備実験・調査のまとめ方
13	研究テーマの具体化と討論（2）	13	予備実験・調査の発表と課題（1）
14	研究テーマの具体化と討論（3）	14	予備実験・調査の発表と課題（2）
15	進捗状況・問題点の確認	15	本実験・調査に向けた問題点の整理（1）
16	前期のまとめ	16	本実験・調査に向けた問題点の整理（2）

到達目標

1．各自の研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
2．各自の研究テーマを内外の先行研究と関連づけて、深めることができる。
3．各自の研究テーマに即した方法論を展開できる。
4．各自の研究テーマに即した研究計画を作成、実施することができる。
5．各自の研究テーマについて、簡潔明瞭にプレゼンテーションを行うことができる。

履修上の注意

研究において学術的な意義を見出すとともに、社会にどのように貢献できるかについて問いを持ちながら取り組むこと。

評価方法

修士論文作成へ取り組む姿勢、意欲、態度に加えて、本実験・本調査のまとめ方によって評価する。

テキスト

適宜、必要に応じて紹介する。

特別課題研究Ⅱ　　大川 一郎

授業概要

中間報告、中間発表などにおいて客観的評価を受け、同時に明らかにされた課題について誠実に向き合い、研究テーマにふさわしい解決を通して、より高度な研究活動を実践する。

予備調査、本調査などによって収集されたデータの適切な分析の方法と視点を確認、討論しながら、策定された研究課題の達成状況を確認し、より高度な修士論文の完成を目指した指導を行う。

授業計画

＜前期＞		＜後期＞	
1	修士論文作成プロセスに関する課題の確認	1	春期の振り返りと秋期の達成目標の確認
2	中間報告会に向けた研究課題の確認	2	中間報告に向けた予行演習と討論（1）
3	中間報告会に向けた予行演習と討論（1）	3	中間報告に向けた予行演習と討論（2）
4	中間報告会に向けた予行演習と討論（2）	4	中間報告会の振り返りと課題の確認
5	中間報告会に向けた予行演習と討論（3）	5	本調査の実施（1）実施依頼
6	中間発表の振り返りと課題の確認	6	本調査の実施（2）データの確認
7	本調査の設計（1）目的の確認	7	本調査の実施（3）結果の１次分析
8	本調査の設計（2）方法の確認	8	本調査の実施（4）結果の２次分析
9	本調査の設計（3）結果分析の確認	9	修士論文のプロット作成と検討
10	本調査の設計（4）倫理的検討	10	修士論文の作成：序論
11	研究倫理申請書の作成と確認	11	修士論文の作成：目的と方法
12	研究の進捗状況の確認（1）	12	修士論文の作成：結果分析と考察
13	研究の進捗状況の確認（2）	13	修士論文発表の予行演習（1）：プロット作
14	研究の進捗状況の確認（3）	14	修士論文発表の予行演習（2）：プロット修
15	春期のまとめ：進捗状況の中間総括	15	まとめと今後の課題の確認

到達目標

（1） 各自の研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
（2） 各自の研究テーマを内外の先行研究と関連づけて、深めることができる。
（3） 各自の研究テーマに即した方法論を展開できる。
（4） 各自の研究テーマに即した研究計画を作成、実施することができる。
（5） 各自の研究テーマについて、簡潔明瞭にプレゼンテーションを行うことができる。

履修上の注意

学術的意義とともに、人々の福祉に貢献するという問題意識を持って、主体的に研究に取り組むことが求められる。

特別課題研究は、2 年にわたる修士論文完成を最終目標としている。そのためには日々の着実な課題への取り組みが必要であるが、そのためにも日々の心身の健康に留意することが求められる。

予習・復習

予定される課題を確実に仕上げ、終了後は、授業内容を反復し、修正を行うこと。

評価方法

論文作成への取り組みの姿勢・意欲・発表の態度（30%）、論文の完成度（70%）によって評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて適宜紹介する。

特別課題研究Ⅱ　藤枝 静暁

授業概要

中間発表をおこない、他者からの評価・指摘・意見を踏まえて、研究計画および研究方法の再検討および修正をおこない、より高度な研究を目指す。

予備研究、本研究で収集した資料、データを分析し、その結果を目的・仮説と照らしながら、発表および討論を繰り返しながら考察を深めていく。自分の研究について、先行研究に対する研究成果と新たな知見、および、今後の課題を明確にし、修士論文の完成を目指して指導する。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成に関する総合ガイダンス	1	秋期ガイダンスと秋期の達成目標について
2	第１回中間発表に向けた研究計画の確認	2	本調査結果の分析と考察の討論①：分析結果
3	第１回中間発表のリハーサルと討論①:問題、目的、仮説の確認と修正	3	本調査結果の分析と考察の討論①：考察
4	第１回中間発表のリハーサルと討論②：分析方法、結果の予測、考察の視点の確認と修正	4	第２回中間発表のリハーサルと討論
5	第１回中間発表と質疑応答	5	第２回中間発表と質疑応答
6	本調査の研究計画の吟味①：問題と目的の確認	6	修士論文プロット作成
7	本調査の研究計画の吟味②：方法の確認	7	修士論文のプロットの修正
8	本調査の研究計画の吟味③：分析方法の確認	8	修士論文の原稿作成①：序論
9	本調査の研究計画の吟味④：倫理的配慮の検討	9	修士論文の原稿作成②：問題、目的、仮説、方法
10	研究進捗状況の中間総括	10	修士論文の原稿作成①：結果と考察
11	本調査の実施の報告①：実施状況や回収率の報告	11	修士論文の原稿作成①：全体の吟味
12	本調査の実施の報告②：データの確認と要約	12	修士論文発表のリハーサル①：プロットの作成
13	結果の分析①：素データ	13	修士論文発表のリハーサル②：プロットの修正
14	結果の分析②：分析モデル	14	修士論文発表と質疑応答
15	春期のまとめと研究進捗状況の確認	15	まとめと今後の課題の確認

到達目標

1．中間発表を行い、質疑に対して適切に応答することができる。
2．中間発表での意見や指摘を踏まえて、研究計画の精度を高めることができる。
3．倫理的配慮を満たした上で、研究計画を実行することができる。
4．得られた研究結果を適切に分析し、結果の解釈をおこない、論文としてまとめることができる。
5．中間発表や修士論文発表において、自分の研究を適切にプレゼンテーションすることができる。

履修上の注意

研究計画に沿って、地道に研究を進めること。研究を通じて、教育・福祉・医療おける現場の発展と課題の解決に貢献するという意識を常に念頭に置きながら、主体的かつ意欲的に研究活動に取り組むこと。

評価方法

修士論文作成へ取り組む姿勢、意欲、態度に加えて、完成した修士論文の完成度によって評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する。

特別課題研究Ⅱ　　佐々木 美恵

授業概要

修士論文作成に向けて，次のステップに沿って指導する。（1）心理学研究の形式と方法に基づいて，本調査を実施する。（2）研究目的に対応したデータ分析を行う。（3）形式と内容を整えて，修士論文の執筆を行う。（4）最終審査に向けたプレゼンテーションの準備を行う。（5）最終審査での助言指導を踏まえて，最終提出に向けた修正を行う。（6）調査結果希望者へのフィードバックを行う。

また，春期の第２回中間報告会の事前・事後指導を行う。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
1	本調査準備①	1	執筆/結論
2	本調査準備②	2	本文推敲・修正①
3	本調査準備③	3	本文推敲・修正②
4	本調査実施/データ分析①	4	本文推敲・修正③
5	本調査実施/データ分析②	5	本文推敲・修正④
6	本調査実施/データ分析③	6	本文推敲・修正⑤
7	本調査実施/データ分析④	7	最終審査準備①
8	執筆/目次，構成	8	最終審査準備②
9	執筆/序論①	9	最終提出のための修正①
10	執筆/序論②	10	最終提出のための修正②
11	執筆/目的	11	最終提出のための修正③
12	執筆/結果①	12	結果概要希望者への報告書作成①
13	執筆/結果②	13	結果概要希望者への報告書作成②
14	執筆/考察①	14	結果概要希望者への報告書作成③
15	執筆/考察②	15	抄録作成

到達目標

4. 予備的検討を踏まえた本調査計画の立案ができる。
5. 研究倫理を適正に遵守して、調査を実施することができる。
6. 研究目的に応じた適切な手法を用いてデータ分析を行うことができる。
7. 修士論文研究としての形式と内容を踏まえて、修士論文を作成できる。

履修上の注意

自ら主体的，積極的に取り組むこと。

予習・復習

予習：疑問点・討論点を整理する。
復習：授業内での指導を踏まえて研究を進める。

評価方法

修士論文の完成度 80%，取り組み態度（主体性，意欲）20%によって評価する。

テキスト

使用しない。必要な文献は適宜紹介する。

特別課題研究Ⅱ　　羽鳥　健司

授業概要

中間発表において受けた指導により明らかになった課題の修正を行い、研究を発展させ、修士論文の到達点を決定し、データの収集を行う。次に、収集したデータの分析方法や、検討する現象の理論的な位置づけ等に関する最終的な確認を行い、修士論文を作成するよう指導する。

授業計画

到達目標

1．研究課題を明確にし、課題に到達するための計画を立てることができる。
2．研究課題を達成するための方法を検討し、実施することができる。
3．研究課題に即した分析を実施し、修士論文を作成することができる。
4．作成した修士論文に基づいて、明瞭簡潔にプレゼンテーションすることができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成に向けた総合ガイダンス	1	秋期の達成目標に関するガイダンス
2	各自の研究計画の発表	2	各自の経過報告
3	第１回中間発表の発表練習（1）：研究目的と方法の確認	3	第２回中間発表の発表練習：グループ（1）
4	第１回中間発表の発表練習（2）：分析方法と結果の確認	4	第２回中間発表の発表練習：グループ（2）
5	中間発表の評価の吟味	5	中間発表の評価と分析方法や研究意義の調整
6	研究の方向性に関する最終的な確認	6	修士論文の現実的な到達点の吟味（1）：分析手法の確認
7	本調査の実施計画の発表と討議（1）：研究目的の吟味	7	修士論文の現実的な到達点の吟味（2）：分析結果の確認
8	本調査の実施計画の発表と討議（2）：研究方法の吟味	8	修士論文草稿の作成（1）：要約の作成
9	本調査の実施計画の発表と討議（3）：分析手法の吟味	9	修士論文草稿の作成（2）：問題と目的
10	本調査の実施計画の発表と討議（4）：結果の予測	10	修士論文草稿の作成（3）：方法と結果
11	本調査の実施（1）：倫理的配慮の確認	11	修士論文草稿の作成（4）：結果と考察
12	本調査の実施（2）：ローデータ取得と入力	12	修士論文発表の予行演習（1）：プレゼンテーション方法の確認
13	本調査の実施（3）：分析結果の報告	13	修士論文発表の予行演習（2）：全体の確認
14	研究進捗状況に関する総合的な評価	14	修士論文発表と質疑応答
15	春期のまとめ	15	修士論文のまとめ

履修上の注意

特別課題研究Ⅰで習得した修士論文作成のための方法論を駆使して、データ収集や分析等の実務的な学習が中心となる。課題作成に向けて、これまで以上に自発的な態度が求められる。

評価方法

研究課題への積極的な取り組み、およびその内容について評価する。

テキスト

適宜紹介する。

特別課題研究Ⅱ　　原 恵子

授業概要

修士論文完成に至るまでの研究活動を指導する。具体的には，中間発表において受けた指導に基づき，研究計画を吟味し，本調査を実施する。その後，研究目的に対応したデータ分析や考察の検討，適切な形式での修士論文の執筆，審査に向けた発表準備など，個別状況を踏まえた指導を行う。

中間報告会，および修士論文発表会に関する事前・事後の指導を行う。

授業計画

＜前期＞		＜後期＞	
1	修士論文作成に向けた今年度ガイダンス	1	春期のふりかえり，修士論文作成の確認
2	各自の研究の現状報告と討論	2	本調査の分析
3	第１回中間発表に向けた準備と討論①	3	本調査の分析・考察
4	第１回中間発表に向けた準備と討論②	4	第２回中間発表に向けた準備と討論①
5	第１回中間発表に向けた準備と討論③	5	第２回中間発表に向けた準備と討論②
6	第１回中間報告のふりかえりと課題の確認	6	第２回中間発表に向けた準備と討論③
7	本調査の計画発表と討議①	7	第２回中間報告のふりかえりと課題の確認
8	本調査の計画発表と討議②	8	修士論文の執筆①(目次・序論)
9	本調査の計画発表と討議③	9	修士論文の執筆②(問題・目的)
10	研究倫理申請書の作成	10	修士論文の執筆③(方法)
11	研究倫理申請書の確認	11	修士論文の執筆④(結果)
12	本調査の実施①	12	修士論文の執筆⑤(考察)
13	本調査の実施②	13	修士論文発表の準備と討論①(発表内容の確認・検討)
14	本調査の実施③	14	修士論文発表の準備と討論②(発表内容の確定)
15	春期のまとめ，研究進捗状況の確認	15	修士論文の発表と質疑応答

到達目標

(1)研究倫理に関する配慮のもと，調査を実施できる。
(2)修士論文が作成できる。
(3)完成した修士論文に関する研究発表ができ，質疑応答に対応できる。

履修上の注意

学術的な意義および，社会や人々の福祉に貢献するという意識を持ち，主体的かつ意欲的に研究に取り組むこと。研究計画に基づき，研究倫理に対する高い意識のもと，着実に研究を進めること。

予習・復習

各回のテーマや課題に，確実に誠実に取り組むこと。

評価方法

修士論文作成への取り組み姿勢(30%)，完成した修士論文の内容(70%)について，総合的に評価する。

テキスト

テキストの指定はない。研究内容，進捗状況に応じて適宜紹介する。

特別課題研究Ⅱ　　遠藤　寛子

授業概要

中間発表に向けて予行演習を行い、効果的な発表スキルの習得を目指して指導する。また、中間発表を振り返り課題と向き合い、さらに研究計画を洗練させる。修士論文の執筆に向けて本実験・調査を実施し、統計的分析を行い、より一層考察を深められるよう指導する。得られた結果を討論し、本研究の意義を再度見直せるよう助言する。

授業計画

＜前期＞		＜後期＞	
1	修士論文の作成に向けてのガイダンス	1	修士論文の作成に向けてのガイダンス
2	第１回中間発表へ向けた研究計画と修正	2	結果のまとめ
3	第１回中間発表の予行演習（1）	3	結果のまとめと考察
4	第１回中間発表の予行演習（2）	4	第２回中間発表の予行演習（1）
5	第１回中間発表の予行演習（3）	5	第２回中間発表の予行演習（2）
6	中間発表の振り返りと課題の確認	6	第２回中間発表の予行演習（3）
7	本実験・調査の検討（1）	7	第２回中間発表の振り返りと課題の確認
8	本実験・調査の検討（2）	8	修士論文の執筆と討論（1）目次・序論
9	本実験・調査の検討（3）	9	修士論文の執筆と討論（2）問題・目的
10	本実験・調査の検討（4）	10	修士論文の執筆と討論（3）方法
11	研究倫理申請書の作成	11	修士論文の執筆と討論（4）結果
12	研究倫理申請書の確認	12	修士論文の執筆と討論（5）考察
13	本実験・調査の実施（1）	13	修士論文発表の予行演習（1）
14	本実験・調査の実施（2）	14	修士論文発表の予行演習（2）
15	本実験・調査の実施（3）	15	修士論文発表と質疑応答
16	前期のまとめ	16	後期のまとめ

到達目標

1．各自の研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
2．各自の研究テーマを内外の先行研究と関連づけて、深めることができる。
3．各自の研究テーマに即した方法論を展開できる。
4．各自の研究テーマに即した研究計画を作成、実施することができる。
5．各自の研究テーマについて、簡潔明瞭にプレゼンテーションを行うことができる。

履修上の注意

研究において学術的な意義を見出すとともに、社会にどのように貢献できるかについて問いを持ちながら取り組むこと。

評価方法

修士論文作成へ取り組む姿勢、意欲、態度に加えて、修士論文の完成度によって評価する。

テキスト

適宜、必要に応じて紹介する。